

社会の変化に沿った学会 IEICE along the Social Changes

監事 鈴木 博



私は昨年大学を定年退職したところである。現役時代を振り返ってみれば、社会の変化を受けて職場も大きく変化してきた。最初に勤務した研究所（公社）は株式会社となり、従事していた事業が分社化され転籍した。国立大学に移籍すると、今度は大学が法人に変わった。そして制度が変われば、業務のスタイルや論文の書き方が大きく変わることを身をもって体験してきた。

例えば、私は入社した翌年に本会に入会したが、研究所の発表練習は誠に厳しく、論文の執筆では、何度も直属上司と相談して書き直しをした後に、その上の上司、またその上の上司にもコメントを頂き、修正に修正を重ねた。基本的なオリジナリティは変わらないものの、完成した論文の表現は原型をとどめず、研究の視野は大きく広がった。このときの経験から、自問自答しながら何度も大幅に変更を加えることが私の研究スタイルになってしまった。しかし、今ではこのような徒弟制度的な教育は少なくなってきている。

近年、会社の上司は標準化と事業化で多忙である。大学教員は教務や対外活動で忙しい上に、担当する学生数も多くなった。特集の投稿期限もすぐに来る。発表も会議だけで済ませてしまうものが増えている。このような論文の生産性低下が危惧される状況では、指導者の負担を軽減するため、論文のリテラシーを学会で指南したり、研究会資料を論文にするようエンカレッジする取組みをこれからも強化しつつ持続する必要がある。難しいとは思いますが、できれば個別論文の推敲を第三者的な熟練者が手助けすることも望ましい。

研究者にとって学会は、論文や会議での発表、そのフィードバック等による情報収集を通して次のステップに進むためのプラットフォームである。掲載論文の質の向上と閲覧可能な論文数の増大は学会に対する基本的な要求である。この点から言えば、専門家が求める論文の質を確保するよう査読の質を維持する必要もある。

現役時代の経験でもう一つ記憶に強く残っていることがある。それは十分考え尽くした投稿論文があっけなくリジェクトされたときのことである。リジェクトの理由は先行の米国学会小論文に書かれていたため、驚いたのは、指摘された先行論文の構成と論理が投稿した論文の前半とほぼ同一であったことである。査読者の知識と専門性はすばらしいと思った。同時に、十分推敲して論理的に構成したものはほとんど同一のものに収れんすることを学べた得難い経験であった。しかし、今なら類似論文は検索で容易に見つけられる。膨大な構文解析と文献検索を得意とするコンピュータにより、将来は論文の推敲と査読をAIが第三者的に補助してくれるに違いない。

本会は目下一般社団法人への移行過程であり、これから様々な試練を乗り越えなければならない。学会が直面する課題は本会誌（2015年7月号、Web閲覧可能）の小柴会長就任あいさつに詳しいが、当面の最重要課題は健全な財務への改革である。各ソサイエティ等において様々な施策が試行されており、それらの成果が期待される。個人的には、論文と会誌の質と量さえ確保できれば、学会の改革は少し大胆に試行錯誤すべきであると考えている。更に社会変化を考えれば、日本の就労制度が見直され、会社員の副業、退職後の再就労など専門性が多方面で活用されることが求められている。その専門性の向上や権威付けに学会と大学が果たす役割は大きい。学会の改革がこの国の変化に沿うものであれば、学会の社会的位置付けに大きなパラダイムシフトがもたらされる可能性がある。そこから生じる課題の解決はAIだけでは難しい。人間の知恵と選択が肝要だと思うこの頃である。